水菓子屋の要吉

木内高音

青空文庫

一

要吉は、東京の山の手にある、ある盛り場の水菓子屋の小僧さんです。要吉は、半年ばかり前にいなかからでてきたのです。

要吉の仕事の第一は、毎朝、まっさきに起きて、表の重たい雨戸をくりあけると、年上の番頭さんを手伝って、店さきへもちだしたえんだいの上に、いろんなくだものを、きれいに、かざりたてることでした。それがすむと、番頭さんがはたきをかけてまわるあとから要吉は、じょろで、水をまいて歩くのでした。ろう細工のようなりんごや、青い葉の上にならべられた赤いいちごなどが、細い水玉をつけてきらきらと輝きます。要吉は、すがすがしい気持で、それらをながめながら、店さきの敷石の上を、きれいにはきよめるのでした。

時計も、まだ六時前です。電車は、黒い割引の札をぶらさげて、さわやかなベルの音をひびかせながら走っていました。店の前を通る人たちも、まだたいていは、しるしばんてんや、青い職工服をきて、べんとう箱のつつみをぶらさげた人たちです。そういう人たちの中には、いつとはなしに要吉と顔なじみになっている人もありました。

「よ、おはよう。せいがでるね。」

若い人は、いせいよく声をかけながら、新しい麻裏ぞうりで要吉のまいた水の上を、ひょいひょいと拾い歩きにとんでいきました。

なっとう屋のおばあさんが見えなくなったと思うと、このごろでは、金ボタンの制服をきた少年が、「なっとなっとう」となれない呼び声をたてて歩いていました。

そんな朝の町すじをながめながら、店さきをはいている時は、要吉にとっては一日中でいちばん楽しい時なのでした。なぜかというと、それから朝の食事がすむと、要吉にとってはなによりもいやな、よりわけをしなければならなかったからです。店の品物の中から、いたみかけたのや、くさりがひどくって、とても売りものにならないようなものを、よりわけて、それぞれ箱とかごとへべつべつにいれるのです。

枝からもぎとられると、はるばると、汽車や汽船でゆられてきたくだものは、毎日毎日、つぎからつぎへといたみくさっていくのでした。要吉は、なめらかなりんごのはだに、あざのようにできた、ぶよぶよのきずにひょいとさわったり、美しい金色のネイブルに青かびがべっとりとついたりしたのを見るたび、まるで自分のはだが、くさっていくようないたみを感ぜずにはいられませんでした。

よりわけがすむと、今度は、一山売りのもりわけです。いたみはじめたくだものの箱の中から、一山十銭だの二十銭だのというぐあいに、西洋皿へもりわけるのです。そのあんばいが、それはむずかしいのでした。

「そのくらいなのは、まだだいじょうぶだよ。」

少し、きずが大きすぎるからと思って、はねのけると、要吉は、すぐ主人にしかられました。それではこのくらいならいいだろう、ひとつおまけにいれといてやれと、お皿にのせると、

「そりゃあ、あんまりひどいよ。よせよせ。」

と頭ごなしにどなりつけられます。

「おまけなんです。」

要吉がいいますと、主人は、
「ばか、よけいなことをするない、数はちゃんときまってるんだぞ。」と、けわしい目をしてにらみつけます。
要吉は、まったく、どうしていいのかわからなくなってしまいました。ですから仕事がちっともはかどりません。そうすると主人は、「いなかっぺはぐずでしょうがねえなあ。」ときめつけます。
要吉は、そういわれると、ただ、もじもじと赤くなるばかりでした。

二

でも、このごろはだいぶ仕事のこつがわかってきました。要吉は、せっせと手を動かしながら、いろんなことを考えるようになりました。
せっかく、方々の国から送られてくるこれらのおいしい熟したくだものが、店にかざられたまま、毎日毎日こうもたくさんくさっていくのはどうしたことだろう。それでいて、毎日おかみさんが売り上げの中から、まとまったお金を銀行へあずけにいくところをみると、お店は損をしているはずはない。それではこれだけのくさったくだものの代はだれが払ってくれるのだろうか。
それから先は要吉にはどう考えてもわかりませんでした。
一山いくらのお皿の上には、まっ黒くなったバナナだの、青かびのはえかけたみかんだの、黒あざのできたりんごだのがのっていました。
「こんなにならないうちに、なぜもっと安くして売ってしまわないんだろうなあ……安くさえすれば、もっとどしどし買い手があるだろうに……。」
要吉の考えとしては、それがせいいっぱいでした。
夜になると、要吉には、もっともっといやな仕事がありました。
要吉は、毎晩、売れ残ってくさったくだものを、大きなかごにいれて、鉄道線路のむこうにあるやぶの中へすてにいかなければなりませんでした。ごみ箱がすぐいっぱいになるのをいやがるおかみさんは、そのやぶを見つけると、夜のうちに、こっそりと、そこへすてにいけといいつけたのです。
要吉は、うんざりしてしまいました。それで、ある時、要吉は思いきって、おかみさんにいってみました。
「こんなにならないうちに、なんとかして売ってしまうわけにはいかないもんでしょうか。安くでもして……。」
そうすると、おかみさんは、要吉をにらみつけていいました。
「生意気おいいでないよ。なんにもわかりもしないくせに。そうそう安売りした日にゃあ商売になりゃあしないよ。」
「でも……」要吉は、もじもじしながらいいました。
「すてっちまうくらいなら、ただでやった方がまだましですね。」
要吉は、それをいったおかげで、晩の食事には、なんにももらうことができませんでした。要吉は、お湯にもいかずに、空き腹をかかえて、こちこちのふとんの中にもぐりこまねばなりませんでした。
要吉は、その晩、ひさしぶりにいなかの家のことを夢に見ました。ある山国にいる要吉の家のまわりには、少しばかりの水蜜桃の畑がありました。梅雨があけて、桃の実が葉っぱの間に、ぞくぞくとまるい頭をのぞかせるころになると、要吉の家の人びとはいっしょに

なって、そのひとつひとつへ小さな紙袋をかぶせるのでした。要吉の家では、その桃を、問屋や、かんづめ工場などに売ったお金で一年中の暮しをたてていたのです。夏の盛りになると、紙袋の中で、水蜜桃は、ほんのりと紅く色づいていきます。要吉たちは、それをまた、ひとつひとつ、まるで、宝玉でもあるかのように、ていねいに、そっともぎとるのでした。ですから、自分の家の桃だといっても、要吉たちの口にはいるのは、虫がついておっこったのや、形が悪いので問屋の人にはねのけられたのや、そういった、ほんのわずかのものでした。

　要吉は、ある年、近所へ避暑にきていた大学生たちが、自分の家のえんがわへ腰をかけて、一粒よりの水蜜桃をむしゃむしゃと、まるで馬が道ばたの草をでもたべるようにたべちらすのを見た時の、うらやましい驚きをいつまでも忘れることができませんでした。

　――あんなに大事にしてそだてあげた水蜜桃も、こうした東京の店へくれば、まるで半分は、箱づみのままにくさっていくのだ。

　要吉はくやしさに思わず、太ったおかみさんのからだをむこうへつきとばした夢を見て目をさましました。

　と思うと、今度は、やぶの中へすててきた、ネイブルだの、バナナだの、パイナップルだのが、ひとつひとつ、ぴょんぴょんととび上がって、要吉の胸の上で、わけのわからないダンスをはじめました。そうすると、いつのまにか、いなかのおとうさんや妹たちの顔が、それをとりまいてめずらしそうに見物しています。

　――ほんとうに、家の人たちは、まだバナナさえも見たことがないのだ。要吉は、夢の中で、そういいながら、ごろんとひとつ寝がえりをうつと、昼間のつかれで、今度は夢もなんにも見ない、深い眠りにおちていきました。

三

　朝のうちに、店の仕事がかたづくと、要吉は、自転車にのって、方々の家へ御用聞きにでかけなければなりません。それはたいてい、大きな門がまえのおやしきばかりでした。

　勝手口へは、どこの家でも、たいがい女中さんがでてくるのでした。

「それではね、いちごを二箱と、それからなにかめずらしいものがあったら、いつものくらいずつ、届けてくださいな。」

　そういったおおような注文をする家が多かったのです。要吉は、それをひとつひとつ小さな手帳にかきつけました。

　昼からになって配達がすむと、今度は店番です。つぎからつぎと、いろんなお客がやってきます。

「なるべく上等なやつをいろいろまぜて、これだけかごにつめてくれ。ていさいよくのしをつけて。」

　そういって、新しい札をぽんとなげだす人もあります。かと思うと、一山いくらのところをあれこれと見まわってから、ごそごそと帯の間から財布がわりの封筒をとりだす、みすぼらしいおばあさんもあります。

「きんかん、これだけおくれ。」

　そういって、いくらかの銅貨を店さきになげだす子どももありました。

　そういうお金のなさそうな人をみると、要吉は、うんとまけてや

りたい気がしました。どうせ、売れ残ればすててしまうのだもの、買いたくっても買いたくっても買えないような人たちには、どしどしたくさんやったらよさそうなものだと思いました。しかし、そんなことをしようものなら、主人やおかみさんに、しかられるだけならまだしも、こっぴどい目にあわされるにきまっています。

いつか、きたないなりをして、髪をもじゃもじゃにしたそれはそれは小さな女の子が、よごれた風呂敷づつみをぶらさげて、店の前にたっていたことがありました。それは、朝鮮あめを売って歩く子だったのです。女の子は、いかにもほしそうに、店の品ものをながめていました。

要吉は、かわいそうになったものですから、いきなり、きずもののバナナをひとつかみつかんで、女の子にもたせました。と、奥からでてきたおかみさんが、ふいに要吉をどなりつけました。

「なにしてるんだい。」

「え、あの、ローズものを少しやったんです。」

「よけいなことおしでないよ。」おかみさんは、いきなり、うしろから要吉のほっぺたをぴしゃんとなぐりつけました。「やってよけりゃあ、わたしがやるよ。……そんなことをした日にゃあ、店の品もんが安っぽくなってしょうがないじゃあないか。」

要吉は、そんなことを思いだすと、みすみすてるもんだとは思いながらも、貧乏なおばあさんや子どもに対しても、みかんひとつまけてやることができませんでした。

要吉は、なんということなく、毎日毎日の自分の仕事がつまらなくってたまらなくなるのでした。

要吉は、また、ある日、おやしきへ御用聞きにいきました。すると、ちょうどお勝手口へでていた女中が、まっ黒くなったバナナをごみ箱へすてていました。

「おや、どうなすったんですか。こないだお届けしたのは新しかったはずですが。」

要吉は、びっくりして聞きました。

「なあに、これは、もうせんにとっといたのよ。」と女中はいいました。「到来ものやなんかが多くって、奥でめし上がらなかったもんで、しまっといてくさらしちゃったのさ。」

女中は平気な顔でいいました。しかし要吉はなんともいえないくやしい気がしました。

「もったいない話ですね。そんなにならないうちに、だれかめし上がる方はないんですか。」

「ああ、お許しがでないとあたしたちもいただけやしないからね。それに、」と、女中は妙な顔をして笑いながらいいました。「そんなに心配しなくったっていいわよ。こっちでかってにくさらしたんだから、またいくらでもとってあげるわよ。お金さえ払やぁ、おまえさんの商売に損はないじゃあないの。」

「それはそうですけれど……」

要吉は、なんとなくむかむかするといっしょに悲しい気持になりました。店でくさらせるばかりでなく、こうして、おやしきの台所へきても、まだ、たべる人もなくくさらせる。大ぜいの人びとの手をかけて、やっとのことでここまで運ばれてきたとおとい品物がだれにもたべてもらえずにくさっていく。ただ、ごみ箱へすてられるためにばかり運ばれてくるとして、それでいいものだろうか。しかし、一方には、くさりかけた一山いくらのものでさえも、十

分にはたべられない人びとが大ぜいいるのに。

「ああ、今夜もまた、あのやぶへ、くさりものをすてにいかなければならないのか。」

そう思うと、要吉はなんともいえないいやな気持になりました。商売というものが、どうしても、こういうことを見越してしなければならないものだったら、なんといういやなことだろう。

しかし、要吉は、水菓子屋の店をとびだすわけにはいきませんでした。要吉が徴兵検査まで勤めあげるという約束で、要吉の父は、水菓子屋の主人から何百円かのお金をかりたのです。

いくら考えても、要吉には、商売のためにはたべられるものを、くさらせていいというりくつはわかりませんでした。

「大きくなったらわかるだろう。」要吉はそういって自分をなぐさめるよりほかはありませんでした。

「それに年期があけたら、自分でひとつ店をだすんだ。そうすればけっして、品物をむざむざとくさらせるようなことはしやしない。くさりそうだったら、ただでも人にたべてもらう。」

要吉はそうも考えてみました。しかし、それは、要吉が大きくなってみなければ、できることだかどうだかわかりません。

「……その上に、おやしきなどで、たべもせずにすててしまうのは、いったいどうしたことだろう。」

これは、なおさら要吉ひとりきりでは解決できない問題でした。要吉は、女中の平気な顔を思いだすと、ただなんとなく、腹がたってたまりませんでした。

「みんな、もののねうちをしらないんだ。」

要吉はしばらくしてこうつぶやきました。しかしそれだけでは要吉の胸の中につかえている重くるしい塊は少しも軽くはなりませんでした。

（昭３・７）

青空文庫情報

底本：「赤い鳥代表作集　2」小峰書店
　　1958（昭和33）年11月15日第1刷
　　1982（昭和57）年2月15日第21刷
初出：「赤い鳥」赤い鳥社
　　1928（昭和3）年7月号
入力：林　幸雄
校正：川山隆
2008年4月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水菓子屋の要吉

木内高音

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/